

[ エッセイ No.18 「どうぞ体調にお気をつけください」?! ]

4年ぶりにウィーンに行った。時が、止まった。

2019年の7月、ウィーンを訪れた。日本で母の最期を看取り、施設の部屋を片付け、少し落ち着いて、やっと自分の時間を見つけることができた時期だった。オペラ座などのシーズンは終わっていたものの、夏の野外コンサートを訪れたり、友人や家族と集まったり、日々を満喫して、翌年に再び、のつもりだったが…。

そう、コロナが襲ってきてしまったのだ。いつ“明ける”かわからない日々。友人が送って来てくれた「ロックダウン下のウィーン」という写真集を見た時には、人っ子一人いない“幽霊都市”と化した街の様子に、ただただ涙がこぼれた。

そんな中、日本のファンに音楽を届けたいという「使命感」のもと、東京のサントリーホールでのコンサートに来日したウィーンフィルハーモニーの音。胸がいっぱいになってこぼれたこの時の涙には、会場を埋めつくした聴衆の希望と温かさが一緒に詰まっていた。

日本のコロナへの規制対応はヨーロッパより長く続き、その間にはロシアが仕掛けたウクライナへの戦争も加わり、海外への飛行機の数もルートも変わった。この5月に始まったウィーン行の直行便は、羽田空港からではなく成田になっていた。都内からだと結構な違いだ。

そして、私自身もトシをとった！ だって、昔は往復での乗り継ぎなどなんのその、15時間以上かかっても機内ではよく眠れたし、到着後の体力も皆に驚かれるほどだった。例えば、(もちろん40年近く前だけれど!)ドイツから日本に到着した翌日には、オペラの稽古の場に立っていたし、もう少し後でも、到着したその日の夜に、“時差克服”も踏まえて1時間半、ダンスのレッスンにも行った。

いやあ、でも今は、やっぱりまず直行便。それでも疲れは感じる。ああ残念！ それでも久し振りのウィーンは、やはり「我が夢の街」だった。

空港からタクシーで市内に入った途端、緑の中で左側に流れるドナウの運河、右側には見慣れた“昔風”の建物。歴史がいっぱいの街並みに囲まれて、ごく普通に日常生活を送っている人々。なんだか皆の足取りもゆっくりしているような錯覚に陥る。

教会の屋根の塔、鐘の音。流れている空気が優雅というか優美というか。観光馬車の蹄の足音で目が覚める。コロナ禍、つぶれた店もあるのだろうが、40年前から知っている本屋さんやレコード店(!)が今でもある中心街。飲み物などの自動販売機はない。ワイドショーもバラエティもないテレビ番組。女性のアナウンサーも、スタイリストなんかついていないのではと思うほど、ごく普通のブラウスに短めの

タイトスカートで、ニュースやお天気を伝える。愛想笑いもない。

TV の国営放送は3チャンネルあるのだが、その一つは「文化と情報」と銘打っていて、しょっちゅう延々と美しい田舎の、山々の風景が続き、画面下にはお天気情報が流れているかと思うと、地方の歌劇場の初日の公演が観られ、ブゾーニ国際ピアノコンクールのファイナルもそのまま全部流していた。

いくら芸術の国とはいっても、いったいどれだけの人が観るのだろうか、と不思議に思ったら、視聴率ナンカは全く関係ないチャンネルなのだそうだ。まあ、何とせちがらくないこと！

カフェやレストランできびきび働くのは、ほとんどがウェイター、(オーバー、という)、つまり男性で、ちょっとした軽口の会話をしながら、お勧めのメニューや説明をしてくれる。この時期はほとんど皆がどこでも、戸外で食事やお茶をするので、かなり忙しい。

今回は、年齢も職業も違う仲良しの6人で集まった「女子会」もあった。外食ではなく、一人の友人の家。基本的にペア社会なので、実は「女子会」は結構珍しい。(男性だけで集まることも珍しい。) ホストの家のご主人は、時折り一緒のテーブルで話に加わることもあるが、あとはもっぱら我々のためのサービス係！ お料理を運び、取り分け、飲み物に気を配り、お皿を片付けて食器洗い機へ入れてくれていた。オクサマの方は、座りっぱなしで私たちとのおしゃべりに余念がない。よく飲み、よく食べ、よく喋り…、でも振り返ると、そこにいない知り合いの“悪口”は、一切なかった。

え、何をそんなに喋ったかって？ もちろんそれぞれの近況、最近行ったコンサートの話、思い出せないほどもろもろ、でも結構「政治の話」もしていた。オーストリアの政治家の“腐敗”事情が出たかと思うと、元ドイツ首相のメルケル氏とプーチンとの関係、イタリア人と結婚している友人は、イタリアの政治家についてひとしきり嘆く。そこで私が口を挟んだ。「こういう“腐った政治の話”は日本だけではないのね、よかった！」

高層ビルが立ち並び、摩天楼の街を目指すのか、「再開発」という言葉がいたるところで飛び交う日本。一方で、ヨーロッパの古い街並みに憧れ、それを見るために旅行をし、「すごいねえ！」と言いながら写真を撮って感嘆する私たち。

ちょうど東京から戻ってきたばかりのウィーンの指揮者に会ったら、「東京では空が見えないよね」と言った。だから開放感に乏しいと。確かに、都内で上を見上げると、大体どこでも高層ビルに視界が遮られ、空が区切られる。

もう30年以上前になろうか、日本のある地方の中都市でコンサートがあった時、主催者の方に、「この町は高いビルがないからきれいではないでしょう？」と聞かれて唾然としたことを思い出す。

ウィーンの、特に市内は建築物の高度制限があるとかで、5、6階の石造りの古い建物がほとんどだ。だから上を見上げると、空がずうっと広がって、全部繋がって、見える。心が空へ上っていく感じがする。一時は屋根裏にペントハウスをすることも流行ったが、建物自体の高さは変わらない。日本式の「再開発」とは無縁の街だ。とはいっても、内部は本当によく“開発”され、リノベーションされている。フローリングの床は昔ながらの寄木造り、でも貼り付けではなく 5、6cm、時には10cmくらいの厚みがあるので、新しい入居者用には毎回“削って”床をきれいにする。新築のビルもあるにはあるが、天井の高い古い建物の方が求められる。(シャンデリアは、天井が高いからこそ必要で、映える！)

古い建物や街並みを自慢する人たちも多い。それぞれの持つ歴史を語ってくれる友人もいる。何しろ、第二次世界大戦前後にできた建物は、彼らにとって「新しい」のだ。彼らが日本を訪れるたびに、「再開発」された東京の“新たな新しさ”に目を見張るのは当たり前だろう。いつぞや初めて日本に来た友人は、「コントラストだらけの国」と言っていたっけ。

そう言えば、日本の列車や地下鉄の規則正しさにびっくりする人々も多い。ふと思いついて、ウィーン市内の地下鉄の時刻表を見てみた。思わず写真を撮った。これじゃ、電車が時刻通りに来なくても、誰も文句を言わないのは当たり前！

うまく説明できるかどうか…。駅のホームにある「時刻表」は、「時刻表」ではなく、「目安表」とでもいえるだろうか。

例えば、月曜日から金曜日の朝6時から夕方8時ごろまでは、「およそ、3分から6分間隔くらい」としか書いてないのだ。さすがに何年か前から、ホームには一応デジタル表示が、「あと何分で次が来る時間」を教えてはくれるが。

大きな駅の列車には、もちろん時刻表がある。でも今度は、誰もアナウンスはしない。自分で探して見極めて乗って、列車はその時刻が来ると“黙って”ドアが閉まって発車してしまう。(時には、「ドアが閉まります」くらいのアナウンスが入る駅もあるにはある。)

何というサービスの悪さ、と日本人は思うかも知れない。乗り損なったらどうするの、と。でもこれこそ、日本でよく言われる「自己責任」。なんでそんなところにサービスが必要なのか。誰も文句は言わない。音楽もならないし、アナウンスもない。だからとても静かだ！

ウィーンの日々に慣れて、再び日本に戻ってきたら、音の洪水に頭がおかしくなりそうだった。JR も地下鉄も、ホームに行く前から聞こえる案内の声、響く音楽。それも両方向の電車が同時くらいに来たりすると、二つの音楽が混ざるし、結局よく聞こえない。(多分そのせいで、何年か前から方向によって、案内は女性の声と男性の声に分けられた模様だ。)

テレビをつければ、カッワイ〜イ少女たちが高い声でキャーキャー言い、カッワイ〜イ少年たちが踊りながらモチャモチャ溢れている。なんだか落ち着かない。ワイドショーのキャスターと言われる人たちは、ものすごく丁寧だし、私たちの体調を気遣ってくれる。

お天気の情報も詳しくて、(多分自然災害が多い国のせいだろう)、どのチャンネルでも気象予報士がいる。そして朝晩の気温の差が開くと、いつも繰り返される、「皆様、どうぞ体調にお気を付けください」。

ドイツやオーストリアでは、夏でも朝晩の気温が15度以上違うのは、まったく日常的で普通のことでもあるし、(多分日本でも北海道とか、軽井沢とか高原ではそのはずだ。)、あれはいったい何なのだろう。まさか“本気”で言ってくれているはずはないし…。

そうそう、思い出した。私と(元)夫が冬に日本で演奏旅行に出かける時、私の母はいつも「寒いから、風邪ひかないようにね!」と言った。冬には零下10度なんて普通の国の、アマノジャクの夫はこう返していた。「オカアサン、エスキモーの人たちはみんな風邪をひいていると思う?!」